共和国精神とドイツ精神の対決という主題構成を持っているが、主人公H・カストルプの行程は、近代における敬虔主義の検証として理解できる。後期の大作『ファウストウス博士』は、同期のワシントン講演（『ドイツとドイツ人』）と実質的に並行して進められたが、ここでは、宗教的敬虔の問題は、ドイツ・ナチズムの思想的批判的検証というこの作品の中心的位置を占め、「敬虔」は中世後期以来のドイツ精神に内在する人間の「魂」の原始的な性格に由来するものとして、本質的な批判を受ける。

⑤ルターの位置―(1)ルターはマンの「敬虔」の分析においてのみならず、ドイツの精神的・政治的・社会的伝統の分析において最も重要な位置を占めている。マンのルター理解の特色は、就中ニーチェのルター像に規定されていることである。ルターは、音楽の精神、ディオニュソスのものの出現として理解され、ルネサンス（サヴォナローラ）と宗教改革（ルター）は、ある共通した力の発現として理解される。M・ウェーバー、E・トレルチらによる新しい見解には影響は受けていないようである。(2)ルターは、後期中世の都市の中にも宿り、神経症・ヒポコンデリー・ヒステリーなどに見られる、魂の未解放な、悪しき敬虔性、その原始的な性格を継受している。(3)また他方、ルターは、中世の階層的な宗教秩序からの民衆の解放の実現者、グーテンベルクとともに精神の民主化の推進者とも理解されている。フランス革命はルターのこの精神の延長上に位置づけられる。

⑥ロマン主義の中に潜在し、その悪しき帰結としての魂の「原

始性」と等値された「敬虔性」に対抗して、マンが積極的な価値として位置づけようとしたのは、新しいヒューマニズム理解と世界市民主義に対する肯定である。

神道思想のパラダイム

―デルマー・ブラウンの説をめぐって―

原 真和

村岡典嗣（一八八四―一九四六）、石田一良（一九一三―二〇〇六）、デルマー・ブラウン Delmer M. Brown（一九〇九―）は、それぞれ神道思想の本質について考察し、それを神道の三つの特質ないしパラダイムとして示している。

村岡は、「日本神道の特質―東洋思想に於ける日本の特質―」（一九三六）において、神道思想は時代ごとに多様性を示しているが、それにもかかわらず神道の定義を可能にする共通の特質があると言う。その第一は、天皇を尊ぶ皇国主義、第二は、現世を終わらなき世として肯定する現実主義、そして第三は、明浄なることを尊び、それを善しとする明浄主義である。明浄主義は神道祭祀のありよう全般によく現れている。そして、これら三つの特質は、神道の本質の発現であり、日本的なるもの主要な要素であるとする。

石田は、『日本文化史―日本の心と形』（一九八九）第八講、第三章において、村岡を踏まえた上で、「神道の原質構成の三

第12部会

要素」を示している。その第一を生活中心主義であるとし、日本人にとって神は生命を生み出し、豊かにする神秘的な力であり、祭はこの力の更新と増長を確認する宗教的儀礼であるとする。これは、村岡の現実主義を敷衍したものである。また、村岡の明浄主義とも関連している。石田はさらに、村岡の皇国主義を敷衍して、第二の要素、共同体主義とし、神道の神は、広狭の差はあっても、特定の境域を占める（閉める）特殊（particular）な神、共同体の神であって、人類と世界に開かれた普遍的な神ではないと言う。第三の要素を、石田は関数主義と呼ぶ。神道は、本質的には反ロゴス的な思想であるが、それにもかかわらず、そのときどきの有力なロゴス的な思想でもって自らを表現してきた。有力なロゴス的な思想は時代とともに変遷したので、神道思想史には非連続性が見られるが、それにもかかわらず神道の本質的な思想は保持されてきた。このようなことを石田は関数主義と呼ぶ。神道の神はそのときどきの共同体の生活意志の神格化であり、日本人は価値の基準を共同体のそのときどきの生活の中に求め、生活の外部にある永遠普遍のものに求めることを好まなかった。そして、神道こそがつねに日本思想・日本文化の「本体」であり、「原質」であったとする。

ブラウンは『*The Cambridge History of Japan, Volume I, Ancient Japan* (1993) の Introduction において、村岡と石田を踏まえた上で、日本の文化形成のパラダイムを三つ示している。その第一を vitalism と呼んでいるが、これは村岡の現実主義、石田の生活中心主義を言い換えたものである。ブラウンは村岡の皇国主義を敷衍して priestism（祭司主義）とし、こ

れを第二のパラダイムとする。日本社会の組織や共同体においては、政策や能力のゆえにはなく、地位と権威のゆえに尊ばれている人がいて、祭司的な指導力を発揮していると言う。日本社会のこのようなありようをブラウンは priestism と呼ぶ。第三のパラダイムは particularism であり、これは石田の共同体主義を敷衍したものである。ブラウンは、これら三つを日本の文化形成のパラダイムとしているが、それらすべてを神道思想に起源を持つものであるとしている。

私は『*Encyclopedia of Science and Religion* (2003) の "Shinto" の項目において、ブラウンを踏襲しつつ、神道の特徴として、vitalism, ritualism, particularism を挙げた。Ritualism は祭祀主義と訳せる。神道は祭祀によって、その生命をたえず再生し、保持してきた。石田の言う関数主義の背景には祭祀主義があると考える。神道においては、原始時代にまで遡れるであろう宗教性が、科学的世界観とも共存しながら、高度に工業化された社会の中で、なお強い生命力を保持している。世界的に見ても極めて興味深いことである。

近世中期における還俗僧と「神道」

井 関 大 介

二〇〇六年度の日本宗教学会大会において、発表者は上田秋成と本居宣長の神話解釈論争を取上げ、両者が儒仏神という既